

釜山広域市西区

アミドンピソンマウルに行ってきた！

<『むくげ通信』285号 2017. 11. 26>

▼今年(2017年)春、韓国釜山に住む末娘が1冊の絵本を送ってくれた。『할아버지 집에는 귀신이 산다.(ハラボジの家には幽霊が住んでいる)』(図1)である。表紙と題を見ただけでは、「なんだこれは？」という感じであったが、内容をざっと読んでみて思わず引き込まれた。釜山のある地域に日本人の墓石が建材などに使われた村があり、その墓石を通じて現にそこに住んでいるハラボジと、かつてそこに葬られた日本人の幽霊が心の交流をするというものであった。

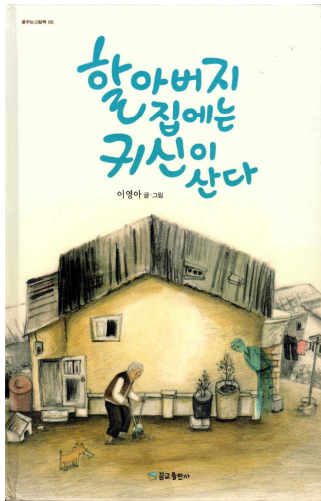


図1 表紙

▼ハラボジは50年以上一人で暮らしていたが、誰もいないはずなのに誰かが横にいるような気がしていた。ある日何かにつまづいてひっくり返った拍子に気を失い、気がついたときには幽霊の姿が見えるようになっていた。幽霊は日本の着物を着ていて、ハラボジの住んでいる家が自分の墓だと言う。先祖の遺骨を探しに来た日本人の子孫に自分の墓石のある場所を教えれば遺骨を故郷へ移してくれ、ようやく故郷に帰ることができる。ハラボジの家のガスボンベを動かして下の墓石の日付を見るが、違っていた。幽霊は見つけてくれたら昔埋めておいた銀をやるからと一緒に探してくれるように頼む。いやだというハラボジのあとをしつこくつきまとってとうとう納得させ、一緒に探すようになる中で互いに事情を話し合う。

▼なんで日本人がわたらの国に来ていたのかと問うハラボジに幽霊は、「昔住んでいた対馬での生活があまりに貧しかったのでお金を稼ごうと朝鮮に来た。釜山には日本人が集まって暮らしていた村があり、そこで豆腐を売って暮らした。商売もうまくいって朝鮮の人らとも仲良く暮らしていた

のだが家族に会いたくなり、一日でも早く金をかせいで故郷に帰ろうと思ったときに病気になってしまい、帰ることができなかった」と。

▼ハラボジは墓の上に家を建てるしかなかった事情を語る。「わしが十五の時、戦争があった。アボジは長男であるわしを南へ逃がした。来たところが釜山だった。故郷に帰る日をいまかいまかと待ったが、故郷は朝鮮の国になってしまい、帰ることはできなかった。あのころ、釜山は避難して来た人々でごったがえしていた。行くところも帰るところもないわしらは共同墓地に住むことになった。後ろめたく亡くなった人にすまないという気持ちもあったが、その時はほかにどうすることもできなかった」と。

▼お互いに事情がわかって、明日からまた、一緒に墓石を探そうということになって話が終わる。「あとがき」には次のようにある。

▼「釜山のアミドンには碑石村という所がある。アミドンは昔日本人の共同墓地であった。朝鮮時代の草梁倭館で働いていた日本人たちの墓がここに混在していた。今は勾配のある丘に小さな家がぎっしりと詰まっていて共同墓地の痕跡を見つけることはできない。急な階段と粗末な壁、軒下に敷いた石、植木鉢の台などに今も碑石が置かれている。韓国戦争当時、釜山へ避難して来た人々が墓地の碑石やお供え台を利用して家を建てて生活し始め、共同墓地は村へと変貌した。住民た



図2 避難当時の姉弟の絵

ちはそれぞれ事情を抱えてここに土地を得て生きてきた。どんな理由であれ先に居ついた住人を追い出すのは心安らかなものではない。この村の人は、他国に埋められて故国に帰ることのできなかった彼らが気の毒だと、繰り返し言う。自分たちも故郷を離れて共同墓地に暮らす他なかった人たちだから、その心をわからないはずがないのだ。今も家の中に香を焚いて亡くなった人の霊を慰めている村人が多いという。故国に帰ることができず他国に埋められた人たちとこの地で生きて行く

もう一つの失郷民たち…。アミドン碑石村は互いの痛みを抱きしめあって生きる暖かい空間ということができる。」

▼この絵本を読んでいつかは行ってみたいと思っていたが、この10月2日から7日までの日程でようやく行くことができた。2日の午前便で日本を発ち、娘の家に荷物を置いてすぐに下見に行った。地図から降りる駅の見当はついていて、「トソン駅」をあらためて確かめてみると、「チャガルチ駅」の隣ではないか。釜山へ行った日本人が大抵は訪れるチャガルチ市場の目と鼻の先にこのような村があったとは、ちょっとした驚きである。

▼「トソン駅」で降りて8番出口に出ると比較的広い道がなだらかに上っている。これをしばらくまっすぐに進むと、複雑な交差点が現れる。下見で行ったときはまったくどちらへ行けばいいかわからず、適当に見当をつけて歩いたが、この辺りから道はとんでもなく急になり、墓地があったところというのが実感された。「アミドン住民センター」を地図で見つけてそこをめざすが、碑石村には行き着かない。碑石村を案内する掲示物があったのでその示す方向へ行ったが、やはり見つからない。汗はかくし、足はガタガタになるし、(スマホによると 18,712 歩 13.3km,階段にし

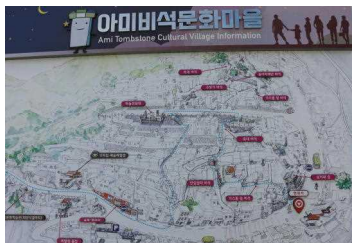


図3 碑石村案内図

て54階まで上った)この日はもうこれで帰ろうかと思った頃に「碑石文化村案内図(図3)」を発見。しかも、この案内図のすぐ横に、日本人が見ればすぐにそれとわかる、まったく墓地の上にそのまま建てた家が、崩れそうになってはいるが確かに



図4 墓地を使って建てた家

建っている(図4)。その下にははっきり文字まで読み取れる墓石が置かれてある。案内図を写真に撮ってから、その示す道順にしたがって村の中に入っていっ

た。いきなり、なんと狭い。人が一人歩くのがやっと、行き違うときには互いに体を横にしなければならぬほどである。これだけ見ても、どれだけ多くの人が狭い土地にひしめき合って暮らさざるを得なかったのか、当時の様子が目に浮かぶようであった。

▼その後は、カメラの画面に地図を表示しながら墓石を確認していった。文字の読み取れた墓石の



図5 Dの墓石

年代と前後の主な出来事のあった年代と比較しやすいように順に並べると、次のようである。

(■は墓石)

- 1851 年 ■A 嘉永四辛亥年七月十七日(?)
- 1867 年 大政奉還
- 1871 年 廃藩置県＝外交権が対馬藩から外務省に移る。
- 1872 年 外務丞花房義質が釜山に赴き草梁倭館を接收
大日本公館と改称するも外交問題化
大院君は退去を要求
- 1875 年 江華島事件
- 1876 年 日朝修好条規 外交使節ソウル駐在 倭館廃止
- 1890 年 ■B 明治二十三年八月廿(?)
- 1902 年 ■C 明治三拾五年九月九日 木平(?)三郎
- 1909 年 ■D 明治四十二年五月廿七日歿
- 1910 年 「韓国併合」
- 1913 年 ■E 大正二年八月十二日 俗名山下利次
行年廿八才

▼釜山倭館がその機能を失ったはずの1872年以降、「韓国併合」以前にもこの地に住んで墓までつくった人が何人もいる。この人たちはこのときこの地で何をしていたのであろうか。秀吉の朝鮮侵略の後、対馬の宗氏が努力して国交を回復し、倭館がつくられて貿易も行われたという、数行の教科書的知識では理解不能な事実である。倭館についてもう少し詳しく勉強してみなければならないと思います、『新・倭館—鎖国時代の日本人町(田代和生 2013)』を読みはじめています。当時の日本・日本人が朝鮮から得たもの・得たかったものの莫大さがわかる。異国の地に日本の墓制にしたがって墓までつくる、これは何を意味するのか。